

MICROTECH Knives

マイクロテック・ナイフ

文・写真：ヒロ・ソガ
TEXT・PHOTOS:HIRO SOGA

ファクトリーナイフの中でも、
その高い工作精度と洗練されたデザインで
人気を博しているのが、マイクロテック社である。
アンソニー・マーフィオンが率いる
マイクロテック・ナイフの魅力に迫ってみたい。

URL www.microtechknives.com





Susan & Anthony Marfione

スーザン&アンソニー・マーフィオン。長年連れ添った二人が、マイクロテック社の両輪となっている。天才肌のトニーがクリエートしたアイデアを、続々と実現できるのは、やはりスーザンの公的にわたる支えの賜物であろう。

初めにカスタムありき。

マイクロテックナイフの魅力に目覚めて早や10年、その理由に思い至ったのはそれほど前のことではない。1997年製のSOCCOM(ソークコム)フォールダーがそのきっかけだ。何せその造り込みがファクトリーナイフとしては半端ではなかった。特にこのモデルのブレイドのグラインディングは、もう絶対に他のファクトリーナイフにはない、カッコいいものだったのだ。しかし、このソークコムブレイドのグラインディングは、それこそどれもが年代によって微妙に異なる。ファクトリーナイフが、これほど細かいモデルチェンジをするものだろうか。素朴な疑問であった。

どうしてマイクロテックナイフは、ファクトリーナイフでありながら、同じモデルが進化し続けていくのだ? それほど97年モデルを気に入ってしまったのだが、これがまたなかなか見つからないのだ。ブレイドに製造年月とシリアルナンバーが入っていることから、このモデルが大事に作られてきたのがわかるが、なんとも魅力的かつ不思議な人間味を感じるファクトリーナイフだった。

その後、いろんな変遷があつて、せっかく手に入れた97年ソークコムも、カスタムガンのトレードの一部になってしまった。自慢しすぎると、そのツケは自分に返ってくるものなのだ。

で、その素朴な疑問は、数年前にマイクロテック社の社長、アンソニー(トニー)・マーフィオン氏(以降、トニーと呼んではせていただく)と出会って氷解した。初めにカスタムありき、なのだ。

「私のナイフは、どれも初めはカスタムナイフとしてスタートしたんだ。1994年にマイクロテック社がスタートした際も、UDTは私が自分のアパートで、

ハンドファイルを使ってコツコツと作ったものだしね。何本か作ってみたら、周りの皆が欲しいといってくれた。そこから私のナイフに対するパッション(熱意)はスタートしているんだ。

だから、カスタムを基本にして、またまった数のファクトリーナイフを作ったあとも、ユーザーからのフィードバックや自分でここをカスタムして見たいと思うと、フルカスタム、もしくはセミカスタムとしてニューバージョンを作ってみるんだ。

このカスタムの出来具合と、ユーザーの反応を見て、ファクトリーナイフも少しずつ進化していくことになる。ニューモデルが出るのも楽しいが、スタンダードモデルがより良くなるのは嬉しいものだからね。ウチのHALLOモデルなど、もう第五世代だよ」

ここでようやく判つたのだが、マイクロテックがらみのナイフには、いくつかのロゴが存在する。まず、楕円にマイクロテックの文字が入るのは、ファクトリーナイフとして生を受けたナイフたちだ。これは一番手に入れ易いといえよう。そしてクロウ(この場合は鷲の爪足)ロゴが入っていると、セミカスタム、もしくはリミテッドラン(限定販売)となる。さらに究極がMの文字をかたどったガードの付いたタガーロゴ、これはトニー自身のフルカスタムモデル、という証拠なのだ。

他にも年代によっていくつかのロゴが存在するが、ややこしくなるのでここでは割愛させていただきます。

「私のナイフには、すべて製造した年月とシリアルナンバー、そして使用した鋼材の名前を入れるようにしている。自分のナイフがいつ頃作られて、どんな鋼材でその切れ味を見せるのか。それをオーナーが知ることは、いい意味の愛着につ

ながると思う」

マイクロテックでは、会社のサイトにいくとそのシリアルナンバーを使って、自分のナイフを登録することが出来る。これによって、会社はユーザーの好みを知ることが出来るし、コピー品(これがまた存在するのだ)の管理をすることも可能なのだ。

ここ数年來は、ファクトリーの一部をノースカロライナ州に移転する動きがあったり、兄弟会社であるMSARのラフル製造に追われたりして、マイクロテック・ファクトリーナイフが品不足気味であった。しかしここに来て、もうひとつの工房がオープンできる運びとなり、ナイフの製造キャパシティも飛躍的に増大することとなった。

マイクロテックナイフを、他のファクトリーナイフのようにディスカウントプライスで買えるといいなあ、と願うのは私だけではないだろう。

Anthony Marfione カスタム

ここ数年來、全米でこのナイフショーに行つても、マイクロテックナイフのブース前には、長蛇の列が出来ている。これは、何とかしてトニーのフルカスタムナイフを手に入れることが出来ないかと並ぶ人達なのだ。当然ながら、それまでもトニーのカスタムは存在していたので、それを手に入れようと躍起になっていた人達はいた。しかし、2011年頃からであるが、トニーが少々まとまった数のカスタムをショウ会場に持ち込むことが知られてくると、この待ち構える人の人数が爆発的に増えて行つたのだ。

「マイフィオンカスタムの魅力は一体どこにあるのだろうか? このことも今回の取材で多くことがわかった。『カスタムナイフはそのすべてがハンド

メイドでなければならぬ』と言い切る方たちはこの部分飛ばしてただけだと思つ。少なくとも、マーフィオンカスタムのナイフ達は、CNCマシンを駆使し、最高のマテリアルをすべてマイクロテック内のマシーンを使って仕上げられている。ブレイドがハンドグラインドで、ハンドポリッシュというのは、トニーが譲らない部分ではあるが、その他のパーツは彼自身がプログラミングをし、カスタムのためだけに少量製作をするのだ。

言わせてもらえば、トニーは機械オタクである。年に数回、工作機械の見本市に出かけ、より優れたマシンを見つけると買い込んでしまうのだ。数千円のことわざならぬ、奥さんのスーザンは「困つた人だ」と笑いながら云つていたが、これがマーフィオンカスタムの、ひいてはマイクロテック社の高い工作精度の根源となっているのだ。トニーのポリシーは、完成品のクオリティを上げるには、すべて自社製でパーツを作り、厳しいクオリティコントロールを強いるというものだ。現時点で、97%のパーツは自社生産しているのだという。

「セラミックのボールベアリングは作れないからなあ」とトニーは言うが、どうも自分だけの仕様で、確実な仕事をする職人の会社に特別注文をしているようだ。

現時点で鋼材は、オーストリアに本拠があるBohler(ボーラー)社の、パウダーステンレス鋼をほぼエクスクルーシブ(すべての鋼材として使うこと)で使っている。

「これまでは、ATS34やS35VN等、いいといわれる鋼材はすべて使ってきた。だが、数多くのテストをしてきた結果、ボーラーのエルマックス鋼は、きちんとした熱処理さえすれば、最高

SOCOM DELTA

ソーコム・デルタ

ブレード長3.75インチ、全長9.00インチ、ブレード材Bohler ELMAX、ハンドル材G10/6061-T6

ソーコムラインの最新作は、使用用途に合わせた特殊部隊の名前を冠されている。2012年ブレードマガジンの“アメリカンメイド・ナイフ・オブ・ジ・イヤー(年間最優秀アメリカ製ナイフ)”賞を受賞。



ロックバーは、チタンの別体かつ交換可能なスチールインサートを備えており、確実にブレードをホールドすることが出来る。



KIKU KNIVES 2015

日本のカスタムナイフメーカー

松田菊男

世界で最も知られた
日本人ナイフメーカー松田菊男。
人気のキクナイフの切れ味と
耐久性をフィールドテスト！

- 文・写真：長谷川朋之
Text & Photos: Tomo Hasegawa
- 商品問合せ：山下刃物店 TEL079-222-1109
URL <http://yamashita.org/>



世界で大人気の KIKUナイフ

キクナイフの勢いが世界で止まない。
「大好評だよ！」

ブレイド・シヨウウ2015の会場から、
そう言ってヒロ・ソガさんがレポートし
てくれた。

キクさんこと、松田菊男さんがアメリ
カナイフ界に進出して、もう何年になる
のだろう。毎年参加しているブレイドシ

ヨウでも、キクさんが歩いていると、
「KIKU! あとでテーブルに行くか
らな！」

「KIKU! 今年はどんな新作を持っ
てきたんだい？」

あちこちから声がかかる。キクさんは、
手をひらひらと振りながら

「See you, see you」

と全くの余裕である。

「おつ、あれ誰だった？ 毎年買っていく
れるぞ」

と名前は全く覚えていないのだが、結
構な記憶力である。

KIKU Knives

今や数多くのファンを持ち、キクナイ
フを取り扱うディーラーが引きも切らな
い状況になってきた。SOG社とのコラボ
レーションモデルも順調で、アメリカ
で一番知られている日本人メイカーであ
るのは間違いない。特に長年キクさんの
仕事を見てきているベテランナイフメイ
カーの中には、わざわざキクさんのテー

ブルまでやってきて、挨拶していく。あ
のナイフメイカー&デザイナーとして有
名な、ビル・ハーシーもそのひとりだ。

「ああ、私はキクがアル・マー・ナイフの
グラインドをしていた頃から、知ってい
るよ。彼のテクニクは、尊敬に値する
と思う」

マイクロテックの、トニー・マーフィ
オン夫妻とも友人だ。

「キクのグライディングは、凄いの一
言だ。同じクラフトマンとして、尊敬し
ている。日本のトラディショナルな方法
で、あつという間にブレイドを削ってし
まうんだからね。まさに『マスター』だよ」

他にも、飛ぶ鳥を落とす勢いのファク
トリ、スバルタン・ブレイドのオーナ
ー、カーティス&マーク、バウイダマン
ブレイドのベン&アンドリュースも、必ず
向こうから挨拶に来るといふ人気度であ
る。

シアトルにあるナイフディーラーに話
を聞いてみた。

「キクナイフは人気あるよ。まず切れ味



睦月 & 如月

Mutsuki & Kisaragi

(手前)「睦月(ムツキ)」全長195mm、ブレイド長87mm。/[如月(キサラギ)]全長198mm、ブレイド長90mm。
/ともにブレイド材OU-31、ハンドル材G-10。価格3万7,800円。

フルフィンガーグローブをインパラ角状の削りに内包する。キクナイフの印象を新たにする
デザイン。ハンドルがナイフをスッポリ包み込むコンシールドタング構造で、見た目よりず
っと軽量で使い易い。キクナイフの新ラインだ！



キクナイフにはカイデックスシースが付属。しっかりホ
ールドされるだけでなく、ブレイドがシース内部ですれ
ないなど、微に入り細に入り配慮された上質な作り。

ATLANTA BLADE SHOW 2015

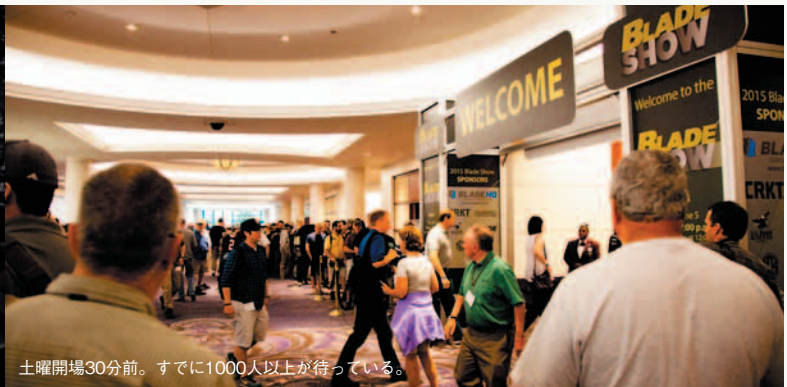
アトランタ・ブレイドショー 2015

US ナイフ戦線変動あり。これまで、適正な価格で、いいモノを作っていればそれなりに売れるというのが、世界最大のナイフ市場 USA の姿であった。しかし、ここにきてフォールディングナイフのマーケットに占める割合が、異様に大きくなっている。世界最大のナイフの祭典、ブレイドショーを背景に、最新の US ナイフ事情をお伝えしたい。

文・写真：ヒロソガ Text & Photos:Hiro Soga



リック・ヒンダー最新カスタム。ハンドル形状はXM-18だが、ブレイドはカスタムだ。



土曜開場30分前。すでに1000人以上が待っている。



おなじみナイフディーラーBusse(ビューシー)のディスカウント販売。



Ferrum Forge(フェラム・フォージ)ナイフワークスの新作 "Mordax"

最適な情報源

今、どんなナイフがアメリカで売れているか。

ナイフ好きとしては、やはり気になるところではないだろうか。

そんな最新事情を肌で感じられるイベントが、年に一度満を持して開催されるブレイドショーなのである。7000テーブル+250ブースというその規模と1万人以上の入場者数もさることながら、その参加者の顔ぶれと中身の濃さがハンパではないのだ。

まず、人気メーカーと呼ばれる人達の最新作を見ることがよって、彼らがどういう方向に力を入れているかをのぞくことができる。例えば、ダニエル・ウインクラー、アーニー・エマソン、リック・ヒンダー、タッド・ベッグ、トニー・ボーズ、トニー・マーフィオン、ジョン・ヤングといった超有名なところは、通常のオーダーはもう受けていないにもかかわらず、ブレイドショーのためのスペシャルモデルを引っさげてやってくる。当然のごとくその数は限られているので、手に入れるためには厳しい抽選に勝ち抜かなくてはならない。それでも、あの有名メーカーの最新作が、プレミアなしの価格で手に入るのだから、これはブレイドショーならではの醍醐味といえる。

また見逃せないのは、力をつけてきている実力派中堅メーカーたちの意欲作だ。彼らの柔軟なデザインと、決まりにとられないセンスには、目の離せない新鮮さがある。タクティカルフォールダーの新作など、彼らががんばりがマーケットを牽引しているといっても過言ではない。

さらに、このアメリカナイフ業界を支えているともいえるカスタムナイフディーラーたちのテーブルも要注意である。



戸崎茂&裕子

Yuko & Shigeru Tozaki

今年もまた嬉しいお知らせである。戸崎茂さんが、2年連続となる“ベストミニチュアナイフ賞”を受賞した。「2ヶ月かかってしまいました」と控え目に語る戸崎さんだが、他の追隨を全く寄せ付けない仕上がりとっている。

H.H.Frank Style Miniature

HHフランクスタイル・ミニチュア

この小さなキャンパスに、これだけのイングレイブを入れるのは並大抵のことではないだろう。素晴らしい出来である。



Tony Bose Pattern Dogleg Trapper

トニー・ボーズ・パターン
ドッグレッグトラッパー

彼らは、トレンドには敏感で「売れる」と見込んだマイカーのナイフを大量に買付けてくる。いかなれば、カスタムナイフ需要の最大手、そして流行仕掛け人が、このディーラー氏たちなのだ。現在、大手と言われるカスタムナイフディーラーは、約30人といった所だろうか。それぞれに得意分野と特徴があるが、彼らの購買力がナイフ業界のバックボーンなのだという気がしてならない。

今年のブレイドシヨウで一番顕著な変化は、なんといってもファクトリーナイフの充実であった。既存のファクトリー、例えばカーシヨウ社のタクティカル部門である、ゼロ・トーレンス社が4種類

もの限定モデルをリリースしたのを始め、ベンチメイドやスパイダルコ社など、各社から魅力的なモデルが発表されていた。

際立つ動きとして、新しいナイフファクトリーの台頭と、外国からのファクトリー参戦が大いに目立った。ざっと数えただけでも、アメリカンメイドと謳った新ファクトリーが7社、マーシャルアーティストやインストラクターがデザイナーとして新ナイフをリリースした会社が4社もある。それぞれ創立した年には違いはあるが、ブレイドシヨウの参加は今年初めて、もしくは2年目という会社ばかりである。

一方、外国勢の進出も侮れないものがある。イタリアからはLion Stee e Knivesという当地では老舗のナイフメーカーが、アメリカ向けに続々と魅力的なフォルダーをリリースしているし、ロシアからはクラフトマンシップにモノを言わせたハンドメイドナイフが2社から、そして中国からは下請けではなく、製造メーカーとして、独自のモデルを引っさげて2社が参加していた。

特筆すべき点は、これら新規参加マイカーのメインモデルの内訳が、ほとんどタクティカル系フォルダーであることだ。もう今や、タクティカル系という言葉すら、過去のものだと意識しているが、私がブレイドシヨウを取材し始めて以来、今年のシヨウほどこの種のフォルダー率が高かったことは一度もない。加えて、この新マイカーも海外マイカーもそのナイフの出来が悪くないのだ。

特に驚かされたのは、中国マイカー2社である。これまでの中国製というよりも、やはり値段は安い品質は落ちるといったのが通例だった。ところがこの2社の製品は、チタンのライナー、ハンドルの工



作業には互いの連携力が欠かせない。

（ナイフを使おう！）

My First Knife 2015 「里山で遊ぼう！」

文・写真：長谷川朋之
Text & Photos: Tomo Hasegawa



コップに皿にお箸を自作する。「道具を生み出せる道具」。これこそがナイフを含めた刃物の最大の魅力。



切り口をナイフで削って滑らかに仕上げる。ちょっとした作業もできるようになる事が楽しい。上昇志向でグイグイ吸収するのが子供ならではの力。天賦の才だ!!



太田公明作

Ohta Kimiaki

[OFF-FK][OFB 60 IW]

“OFF-FK” “OFB 60 IW”

OFF-FK：ブレイド長60mm、ハンドル長83mm、価格5,000～6,000円(磨きと写真の黒染めブレイドから選べる。ハンドルの素材によって価格が異なる)。「肥後守」に由来する伝統的な構造を、独自の路線でアレンジした作品。緩いカーブで構成された独自のテイストが魅力。

OFB 60 IW(下から2番目)：ブレイド長60mm、ハンドル長82mm、ブレイド材O-1、ハンドル材アイアンウッド。価格1万円。

OFB60は使い易い形状と仕上げが魅力のシーズナイフ。見事なコンシールドタンク構造で作られていて、錆を気にせずガンガン実用できる。

太田公明さんの高度なセンスとテクニックを活かして作られる作品は、ナイフ入門用としてはもちろん、ベテランも納得の1本である。

ナイフは道真を生み出せる道具

豊富な自然の中で暮らしたくて、東京を脱出。千葉県房総半島の町に移住して12年目を迎える。その地で、数年前から「ナイフのインストラクター」として、イベントのお手伝いをしている。大都市では失われてしまった里山を舞台に、ワイルドなアウトドアを体験する内容だ。イベントに参加した子ども達も、ナイフやノコギリを使って色々楽しむプログラム



作品のご提供だけでなく、当日ナイフメーカー自身がイベントに駆けつけてくれた。島田英承氏(左)、古藤好視氏(中)、斎藤実氏(右)、福田正孝氏。ナイフの使い方&製作指導、さらに火熾し&料理と、メーカーさんたちは八面六臂の活躍!



「里山イベント」に共感するカスタムナイフメーカーの方々から、ご提供いただいたナイフ達。太田公明氏、佐治武士氏、尾形峻吾氏、古藤好視氏、斎藤博氏、島田英承氏、中村啓一郎氏、福田正孝氏(五十音順)。最初の1本として彼らの素晴らしい作品が使えるのは幸せだ。

【ニッポン・ライフ見聞録】

●文・写真・田中康弘

山と刃物と人と

特別編

日本は島国であり山の国である。もう一言付け加えると木の国である。狭い国土をコケのように広く覆い尽くす森があつてこそ日本人の生活は成り立った。古来木は燃料であり材料であり生活全てに関係する今で言えば石油より遙かに重要な資源である。しかし山の木々を資源たらしめるには道具と技術が必要なのだ。日本人が大昔から山と共に生きそして受け継いできた英知は今や細々と受け継がれているに過ぎない。そんな貴重な遺産を尋ねて見たいと思う。



これで美しい木目製品が完成。



山源木工の作業場。壁際には栃の巨木が置いてあり人目を引く。

栃の木は残った

人が生きていくには何が必要なのか。最も重要な要素は食べ物である(勿論水も含めて)。当然どうやっても食べ物が入らない場所には住めない。険しい山間地で積雪が4メートルを超える様な場所は一見すると生活が困難に思えるだろう。しかしその様な地域でも古くから人は生き抜いて来た。その力の源とは一体何だったのだろうか。

秋山郷へ

秋山郷は、新潟県と長野県の県境を跨ぐ山里である。新潟県側は津南町に属し、長野県側は栄村に属する。阿仁マタギの子孫が現住する事で知られる地区でもある。この地区は地図で見ると津南側から国道405号が栄村側に延び山へ消えるように行

き止まりになっている。最初これを見ただけでかなり凄い所だと感じた。

津南町から小一時間程走ると秋山郷の大赤沢と言う集落へ入る。ここから僅か300メートルで長野県、正に県境の集落だ。

「いやあ新潟県とか長野県とかあまり意識はしなかったですねえ。親戚や友達も両方に散らばっているすけ」

お話を伺った石澤哲さんは秋山郷生まれの秋山郷育ち、山源木工という木材加工会社を営む社長さんである。大正14年創業の山源木工は、日本いや世界でも珍しい製品を作っている。それは特大の輪切りテーブルだ。普通自然木を利用したテーブルは分厚い板状だが、この商品は年輪がはっきりと見える輪切り状になっている。

「うちが作るまでは輪切りでは無理だと言われてたんですよ。輪切りにするとどうしても外側が割れてしまふんですね」

木は乾燥するに従って縮みや曲がりが生じる。その結果木取りの仕方によっては大きく割れるのだ。一般的な木なら輪切りにすると乾燥して外側から割れるのが普通で、とても

商品にはならない。

「山の現場でね、休憩の時によく木を輪切りにしてテーブル代わりに使っていたんですよ。問題なく使えていたから、もしかしたら出来るんじゃないかなって思ったんです」

テーブルの材料は「栃」だった。他の材では輪切りにすれば外が割れるのに栃はたまに中心に近い部分が少し割れるだけである。外が割ればどうしようもないが中心なら充填材で埋めればいい。こうして最初の輪切りテーブルが世に出たのは今から40年ほど前の事だった。

栃の里

店に置いてある栃の輪切りテーブルはかなり迫力がある。兎に角その形がダイナミックで面白い。年輪も単純ではなく見る角度によっては燃え上がる炎の様に迫るのだ。聞けば樹齢は800年ほどだと言うから驚きである。

「今もこの程度の木は日本中探しても無いでしょうねえ」

現在日本の山では保護林以外で巨木は殆ど残っていないらしい。

巨木で知られる屋久杉の輪切りを現地で見たとある。勿論テーブルではなく衝立状になりその年輪が良

